

## 『こころ』追悼藤村操

Junko Higasa 2015.7.16

『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と、先生はKに二度言って、彼を恋から遠ざけて学問の道に戻そうと望んだ。『学問をして人間が上等にならぬ位なら、<sup>はじめ</sup>初から無学である方がよし』(愚見数則)と書いた漱石は、教師時代、予習をしてこない藤村操に二度、学問による向上を促した。

普段よく知るKの性格に思い至れば、彼の「覚悟」という言葉の意味を見抜けたらろう先生は、「恋」の一字の為に盲目だった。平生の藤村操の態度に思い至れば、彼の言葉に含まれた「覚悟」を見抜けたかもしれない教師は、「学問による向上」精神の為に盲目だった。人間の心のすれ違いである。

漱石は、藤村自死の翌年、寺田寅彦宛に「水底の感 藤村操女子」という書簡をしたためた。操という名前から藤村を女性に見立て、深く精神的に契り水にたゆとう男女の愛の魂を描いた詩であるその手紙は、Kと先生の間、教師と生徒の間の暗黙の愛の契りである「明治の(向上)精神」を表す。

藤村の死の原因を繰り返し考えた漱石は、自分が目指した「学問的向上」が、自然の「人間らしさ」を置いて、理想と引き換えに人間の温かい血を枯らしに行くことだと思い知った時、学問で解き得ない「人間らしさ」の不可解に向上の意義を見出せずに死を選んだ藤村の心に近づいたのだろう。それは「明治の(向上)精神」がもたらした淋しさの共有である。